

H 2 7 . 0 7 . 2 4 日

荒木特許事務所

# ゴマメ通信

( 2 0 1 5 0 4 号 )

発行人：発明を育てる会（千葉発明研究会）<sup>きまいりやぐ</sup>肝入役  
荒木特許事務所 弁理士 荒木 昭 生  
住 所：（千葉本室）  
〒 261-0004 千葉市美浜区高洲2-7-5-103  
Tel./fax043-245-8721 Email:a-araki099@nifty.com



H27. 6. 23 撮影

この通信は、知的財産関連情報や時に感じる話題に関して、筆者のゴマメが自己の知人や友人に気の向くままに発信する一種のエッセーである。ゴマメの生存の証に「ゴマメの戯言」としてご笑覧くだされば幸甚です

## 日本の建築技術と東京オリンピック

オリンピックへ向けに行われた新国立競技場の建設計画が白紙撤回された。これは二本のアーチで屋根を支えるという英国の建築家ザハ・ハディド氏のデザインを実現するために多額の予算を必要とし、初期計画の1,300億円が倍額に近い2,520億円にも膨らむのが原因だという。1千兆円を超える借金を抱えた我が国の経済状態の中で当然のことであろう。

競技場の目的は、選手が存分に競技を行い、観客がその競技を楽しめるに足る会場作りを優先すべきである。デザインも全く無関係とは言わないが、新聞によれば、デザインを見直すと最低6ヶ月は掛かるということである。極論を言えば屋根は単に風雨を防ぐに足りれば良いのである。

したがって、競技場の屋根のデザインは変えずに公費を節約するには、張りぼての屋根でも事足りるのではないかとと思われる。真偽の程はともかく、伝説としての秀吉の「一夜城」の例を見習っては如何なものであろうか。外観さえ損なわなければデザインをそのまま保つに十分な技術もあると思われる。

報道（7月22日、日刊スポーツ）に依れば、設計者であるザハ・ハディド氏も今の時点では、このプロジェクトには最後まで関わりたい意向を示しているようであるから、施工上やむを得ない多少のデザイン変更は許して貰えるのではないかとと思われる。

たとえば、東京ドームに使用されている「空気膜構造」がある。このような技術を参考に天井部分だけ密封構造の風船屋根として膨らませれば二本のアーチに拘ることなくデザインもあまり変えずに、施工出来る技術が存在するのではないかとと思われる。



空気膜構造の屋根に関する技術としては、国際分類でE04H15/00、Fタームではテーマコード2E141に分類されると思われるので検索して見たところ、519件がヒットした。

他にも秀吉並の知恵者が日本の政界・財界・建築界に居ない筈はないと思う。もし、デザインを大きく変えること無く建設料金を初期計画通り維持できる技術があれば、日本の高い技術力を世界に示すことが出来る。オリンピック会場としては最適の構造物となるのではないだろうか。

【新国立競技場完成イメージ】 日刊スポーツ(7月22日配信)